

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## New Totem Pole Made by Bill Henderson for the National Museum of Ethnology, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009696">https://doi.org/10.15021/00009696</a>

資料 Research Resource

国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作の  
トーテムポールについて

岸上伸啓\*

New Totem Pole Made by Bill Henderson  
for the National Museum of Ethnology, Japan

Nobuhiro Kishigami

- |                                   |                        |
|-----------------------------------|------------------------|
| 1 はじめに                            | 4 トーテムポールの制作過程と民博への搬入  |
| 2 北アメリカ北西海岸先住民のトーテムポールと民博のトーテムポール | 4.1 素材となる丸太の入手について     |
| 2.1 トーテムポールとは何か                   | 4.2 制作作業の開始と中断, 再開     |
| 2.2 2020年6月24日建立のトーテムポール          | 4.3 仕上げと着色, 完成         |
| 3 新しいトーテムポール制作の経緯                 | 4.4 日本への輸送と民博への搬入      |
|                                   | 5 トーテムポールの土台作り, 建立, 公開 |
|                                   | 6 結語                   |

\*国立民族学博物館

**Key Words** : Totem Pole, Kwakwaka'wakw, Bill Henderson, Canada, Northwest Coast People  
**キーワード** : トーテムポール, クワクワカワクゥ, ビル・ヘンダーソン, カナダ, 北  
西海岸先住民

## 1 はじめに

2020年（令和2年）6月24日に国立民族学博物館（以下、民博と略称）においてビル・ヘンダーソン（Bill Henderson）氏が制作したトーテムポールが建立された。この建立にあたっては、おもに3つの理由があった。第1は、2024年に民博が創設50周年を迎えるが、その記念事業の一つである。第2は、2020年4月24日に開館予定を予定した国立アイヌ民族博物館の創設を記念する関連事業とする<sup>1)</sup>。第3は、2020年3月19日から6月2日まで開催予定であった民博の特別展「先住民の宝」の関連事業とする<sup>2)</sup>。

本建立プロジェクトは、その規模においても通常の事業とは異なっていた。制作依頼から建立までには少なくとも2年以上がかかると予想され、予算も2,000万円を超えるものであった。このため、建立までの諸事に関して、館長、研究部の関係教員、管理部と情報管理施設の担当職員そして現地の制作者が連携し、実施することが不可欠であった。さらにこのプロジェクトの進行中の2020年（令和2年）前半には、新型コロナウイルス感染症がパンデミック化するという事態が発生するなど予期しない事態にも直面した。

日本では政府が2020年4月7日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発令し、5月25日に首都圏1都3県と北海道の同宣言が解除されるまで緊急事態は続いた。その間、多数の人びとが集まる博物館などの公共施設は一時的な閉鎖を余儀なくされたが、新型コロナウイルス感染症の第一波が沈静化したため、緊急事態宣言解除後に日本各地の博物館は制限付きで開館し始めた。民博は感染拡大の防止と「非常事態」を短期間で収束させる目的で2020年2月28日より6月17日まで臨時休館の措置をとった。そして同年6月18日から制限付きで開館した。このような状況下で6月24日にはカナダ国ブリティッシュコロンビア州キャンベルリバー在住のクワクワカワクウ民族のビル・ヘンダーソン（Bill Henderson）氏が制作したトーテムポールの建立が行われた。

本稿の目的は、このトーテムポールの制作についての記録を残すことである。従って、ここではトーテムポールについて解説した後、制作の準備と交渉、制作過程、輸送、建立について報告する。

## 2 北アメリカ北西海岸先住民のトーテムポールと民博のトーテムポール

### 2.1 トーテムポールとは何か

北アメリカ北西海岸先住民とは、北アメリカ大陸のアラスカ南部からカナダ西岸へて米国カリフォルニア州北部あたりに至る海岸地域にすむ先住民の総称である（岸上 2020a）。クリンキット（Tlingit, Klinkit）やハイダ（Haida）、ティムシアン（Tsimshian）、クワクワカワクウ（Kwakwaka'wakw）、海岸セイリッシュ（Coast Salish）、ヌーチャーヌヒ（Nuu-Cha-Nulth）ら 13 の民族をさし、カナダにおける現在の総人口は約 17 万人である。

この地域は、温暖多雨で森林資源に富み、親潮と黒潮が合流し、北アメリカ大陸へと向かう北太平洋海流からもたらされる水産資源が豊かである。約 2500 年前に現在の北西海岸先住民文化の祖型が形成されたと考えられている。この文化の担い手は、狩猟・漁労民でありながらも豊かな自然資源に恵まれたために定住生活を行い、複雑な社会組織や儀礼を有することで非常に特異な文化を形成したことが知られている（エイムス／マシュナー 2016）。さらに、「アメリカ人類学の父」と呼ばれているフランツ・ボアズ（Franz Boas）がバンクーバー島北部で調査し、民族誌を著したため、文化人類学界では北西海岸先住民は非常に有名になった（Boas 1910; 1935; 1966）。

民族誌によって報告されている北西海岸先住民文化の人目を引く華々しさは、毛皮交易の副産物と言っても過言でない。1790 年代末から 1800 年代前半にかけての欧米人を相手にしたラッコなどの毛皮の交易が、北西海岸先住民の人びとに巨万の富をもたらした。その富を利用して 1800 年代前半には盛大なポトラッチ儀礼などを数多く行うようになり、儀礼に関連する木製仮面や音を出すためのガラガラなどの儀礼具は精巧になり、欧米人との交易を通して新たに獲得した鉄製の斧やのこぎり、のみ、ナイフの使用によってトーテムポールや丸木舟、大型家屋は巨大化した（岸上 2001a; 2001b）。彼らの物質文化を代表するものの一つであるトーテムポールは人間や動物などの姿が彫り込まれたレッド・シダー製の木柱である。その高さは、人の身長ほどのものから 10 メートルを超えるものまで

多様である（細井 2015）。現地では英語でポール（pole）と呼ばれることが多いが、ポールの所有者や制作者の祖先と特別な関係がある動物（トーテムに相当する動物）などが彫り込まれているので、トーテムポールと呼ばれることがある。日本では北西海岸先住民の彫刻柱は、一般にトーテムポールとして知られている。

トーテムポールは、その機能に注目すると、家柱、家屋柱、記念柱、墓標柱、墓棺柱、領域柱、歓迎者像柱、はずかしめの柱に分類することができる（大貫 1997; 細井 2015: 61–65）。家柱と家屋柱は家屋の一部である。家柱は家屋内にあり、多くの場合、屋根を支える柱である。家屋柱は入口柱とも呼ばれ、家屋の正面の壁の中央に立てられる大型のトーテムポールである。実際にドア用の穴があけられ、入り口の役割を果たすものもある。

記念柱は、拡大家族集団や氏族の長（チーフ）が、亡くなった両親や祖父母、祖先をたたえたり、特別な出来事を記念したりして立てるトーテムポールである。死者に関連するのは、墓標柱や墓棺柱である。墓標柱は墓地の記念柱であり、墓棺柱は死者の棺を兼ねたトーテムポールで実際に死者を葬るのに使用する。このほか各地域集団の占有空間を対外的に示すための領域柱や村外の人びとの来訪を歓迎するための歓迎者像柱、特定の人や集団への返礼やポトラッチの開催の義務を遂行させることを促すためのはずかしめの柱などがある。

これら各種のトーテムポールには、人間や動物、空想上の生き物の姿などが彫り込まれている。特に多いのが、各氏族集団の紋章であるサンダーバード（想像上の鳥）、シシウトル（想像上の双頭のウミヘビ）、ワタリガラス、ワシ、オオカミ、シャチ、クマ、ビーバー、カエル、サケ、オヒョウである。これらの動物や想像上の生き物は、家族集団の祖先、あるいは祖先を助けてくれた特別な存在であると考えられており各家族集団の紋章として代々受け継がれている。

カナダ政府は、先住民への同化政策のひとつとして 1885 年から 1951 年にかけてポトラッチ儀礼を法律で禁止したため、関連するトーテムポール制作もほとんど中断した。しかし 1960 年代から伝統文化復興運動が始まると、クワクワカククの古老マンゴー・マーティン（Mungo Martin）らの指導の下に制作を再開した。ブリティッシュコロンビア州内の大学や公立博物館がこの再開と復興活動を支援した。そして現在では彼らの文化を代表する民族の精神的象徴物となってい

岸上 国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて

る。自らの祖父母や両親を記念してトーテムポールを制作したり、地元の学校や病院、町村役場、バンド・オフィス（各集団の先住民政府事務所）の前に立てたり、友好を示すものとして姉妹都市や近隣の先住民集団へと寄贈したりしている。また、国内外の博物館や美術館、個人コレクターからの注文に応じて制作している。トーテムポールは、アメリカ自然史博物館（ニューヨーク）やカナダ歴史博物館（オタワ近郊）、ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館（バンクーバー）をはじめとする世界各地の自然史博物館や民族学博物館で展示されている。現在のトーテムポール制作は、各地のマスター・カーバーと呼ばれる先住民アーティストらの重要な収入源のひとつでもある（岸上 2020b）。

## 2.2 2020年6月24日建立のトーテムポール

今回、民博が制作を依頼し、収集したトーテムポールの基本情報は次の通りである。

- 制作者：マスター・カーバーはビル・ヘンダーソン（Bill Henderson）。彼のもとでジュニア・ヘンダーソン（Junior Henderson）、グレゴリー（グレグ）・ヘンダーソン（Gregory Henderson）、ジョナサン・ヘンダーソン（Johnathan Henderson）が制作作業に従事。
- 制作地：カナダ・ブリティッシュコロンビア州キャンベルリバー（Campbell River）
- 制作完成：2020年1月31日（現地時間）、なお、制作開始は2019年9月上旬
- 種類：記念柱
- トーテムポールのモチーフ：上からワシ、シシウトル（Sisiutl、想像上の3つの頭を持つウミヘビ）、ハイイログマ（grizzly bear）、サケ
- 大きさ：土台部分の直径は121センチメートル、ワシの首回りの直径は67センチメートル、翼の端から端の長さは467センチメートル
- 高さ：9メートル85センチ（参考：本館前の地面からの高さは11メートル40センチ）
- 重さ：3,800キログラム（クレーンつり上げ時の数値）

- 材質：レッド・シダー（主にカナダ西海岸に生育するヒノキ科ネズコ属の針葉樹の一種，学名：*Thuja plicata*），ペンキ，ニス，アルミ板

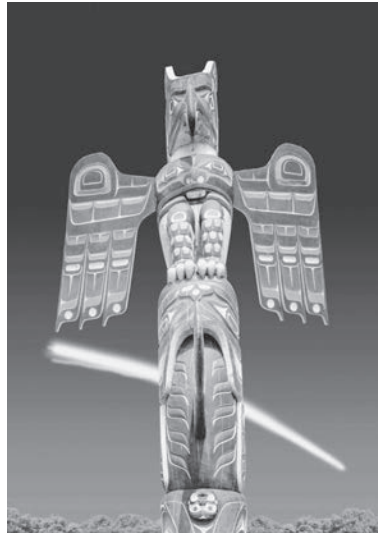
### 3 新しいトーテムポール制作の経緯

2018 年 12 月に吉田憲司民博館長から岸上伸啓に，30 年あまり前に博物館の前庭に立てたトーテムポールが夏の台風によって破損したため，新しいトーテムポールを制作し，建立したいという連絡があった（写真 1・2）。

先にも記したとおり，トーテムポールの制作には，通常，少なくとも 2 年以上の期間を必要とする。制作者の選定と交渉，材料となる丸太の入手が必要となる上に，アーティストによる実際の制作も，他に引き受けた仕事の関連で，当初の約束より長引くことも稀ではない。さらに，完成したトーテムポールの輸送と立ち上げといった一連の作業に要する時間を考えると，余裕を見れば 4 年や 5 年の月日を要しても不思議はない。民博は，2024 年に創設 50 周年を迎えるが，その



**写真 1** 1977 年に国立民族学博物館の前庭に建立されたトーテムポール（トニー・ハントら作）の現在の状況。2020 年 6 月 24 日，Peter Mathews 撮影。



**写真 2** 1977 年に国立民族学博物館の前庭に建立されたトーテムポール（トニー・ハントら作）のポスター。2020 年 6 月，国立民族学博物館広報係提供。

岸上 国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて

タイミングでトーテムポールを確実に立ち上げるには、2019年から動き始めなければならないというのが、吉田館長の当初の判断だった。

ただ、吉田館長には、もう一つの思惑もあった。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの年に、国立アイヌ民族博物館の開設が予定されていた。民博では、それにあわせて、特別展「先住民の宝」を2020年の3月から6月まで開催する予定を立てていた。すべてが順調に進んで、可能であれば、その特別展の開催中にトーテムポールの立ち上げができないものか、というのである。

しかし、吉田館長から打診をうけた時点でトーテムポールを民博に搬入するまでの猶予は、1年半しかなかった。また、その制作費や輸送費を考えると少なく見積もっても2,000万円以上の経費がかかる。経費については民博側で責任をもって予算を組んでもらえるとのことであったので、問題は短期間にトーテムポールを制作できるかどうかであった。

そこで岸上は、カナダ北西海岸地域で先住民文化について研究を行っている三重大大学の立川陽仁やブリティッシュコロンビア大学人類学博物館のジェニファー・クラマー（Jennifer Kramer）ら国内外の大学・博物館関係者に連絡を取り、制作を請け負える先住民のアーティストを何人か紹介してもらった。それらの候補者を中心に制作者の検討を行った。

6メートル以上のトーテムポールや大型の丸木舟（カヌー）を制作するには、一人の制作者だけではできない。通常、いくつかの先住民コミュニティには、マスター・カーバー（master carver）と呼ばれる腕の良い制作者がおり、トーテムポールやカヌーなどを制作するための工房を有している。たとえば、ハイダ・グアイ（Haida Gwaii、旧称クイーン・シャーロット諸島）のオールド・マセット（Old Massett）村のクリスチャン・ホワイト（Christian White）やジム・ハート（Jim Hart）、バンクーバー島キャンベルリバーのビル・ヘンダーソン（Bill Henderson）らである。彼らのもとにはそれぞれ3名以上の弟子がおり、トーテムポールや丸木舟の制作には、マスター・カーバーの指示のもと、彼と彼の弟子たちが従事する。

立川は、これまでのバンクーバー島での調査経験をもとにキャンベルリバー在住のクワクワカワクウの制作者ビル・ヘンダーソン（Bill Henderson）を制作候補者として強く推薦した。また、クラマーは、ブリティッシュコロンビア州北部



テラスにあるフレダ・ディーシング北西海岸美術学校 (Freda Diesing School of Northwest Coast Art) で北西海岸先住民アートの制作技術を教えている、タールタンとクリンキット、ティムシアンの3民族の出自を持つスタン・ビヴァン (Stan Bevan) を紹介してくれた。岸上は、ハイダの制作者クリスチャン・ホワイトを知っていたので候補者の一人とした。候補者として挙げた以外にもハイダのロバート・デービッドソン (Robert Davidson) やジム・ハート (Jim Hart)、ヌーチャヌヒのロン・ハミルトン (Ron Hamilton) ら北西海岸先住民アーティストとして国内外に高い名声を得ているマスター・カーバーがいる<sup>3)</sup>。

岸上は、制作品の質、制作費、制作地、納入期限の4つの点に着目して、候補者の絞り込みを行った。工房を運営している制作者は、博物館や美術館、個人のコレクターを相手にビジネスとしてトーテムポールやカヌーなどの制作を受託しており、制作品に関して一定の質の高さを保っている。制作者によっては、先の数年にわたって制作予定が入っており、ロバート・デービッドソンやジム・ハートのように制作依頼の予約すら受け付けることができないアーティストもいる。

トーテムポールの制作費は、木柱となる丸太代を別にすれば、1フィート(約30センチ)単位で各制作者が設定している。価格は制作者によって異なり、また、交渉次第である。制作者によってかなり開きがあり、一般的には約30センチあたりの制作費は4,000カナダ・ドル以上で、有名なカーバーになるとゆうに5,000ドルを越す。

制作地を重視したのは、2つの理由がある。第1に、トーテムポールの素材となる直径1メートル以上、長さ10メートル以上のレッド・シダーの丸木が入手できる場所が近くにあるかどうか、ひとつのポイントである。近年、バンクーバーやビクトリアなど、制作者の出身地ではない都市部に工房を構えている人が多くなってきた。制作者にとって丸太を現地において実際に目で見て選ぶことはきわめて重要であり、原産地の近くに住む制作者の方が良い丸太を入手する可能性が高い。第2は、完成したトーテムポールをバンクーバーなどの国外への発出港まで輸送する際の利便性である。輸送業者がトーテムポールを安全に、比較的容易に、かつ低コストでバンクーバーまで輸送できる場所に位置しているかどうかは重要な条件の一つである。

4つ目の条件は、こちらが提示する納期に間に合うかどうかである。言い換え

れば、トーテムポールが2020年3月31日までに確実に民博まで到着させるには、2020年1月ごろには制作地から中継地のバンクーバーに向けて発送することができなくてはならない。

以上の4条件を各制作候補者について検討した結果、残ったのはキャンベルリバーのビル・ヘンダーソンとテラスのスタン・ビヴァンであった。制作品の完成度は両者の間では甲乙つけがたかった。2018年12月から2019年1月にかけて両者に電子メールでやり取りをしたところ、納品期日については両者とも何とかなりそうだという回答であった。その一方で、制作費用や輸送条件ではヘンダーソンの方が低コストで、かつバンクーバーへの輸送も、より容易であることが分かった。このため、ビル・ヘンダーソン（付録）を第1候補者とした。

ビヴァンを第2候補者としたもうひとつの理由は、制作するトーテムポールの内容に関してであった。ビヴァンが拠点としているのは、ブリティッシュコロンビア州北部内陸に位置するテラスという場所にあるフレダ・ディーピング北西海岸美術学校の工房である。そこでは北西海岸地域のさまざまな民族出身の若者が、アーティストを目指して学んでいる。ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館のジェニファー・クラマーとのやりとりによって、多様な民族出身の若手が協働で、一つの民族という枠組みを超えた多民族の共生を謳う新しいタイプのトーテムポールの制作が可能かもしれないことが分かった。この試みは「伝統的」ではないが、グローバル化が進み、先住民族間でも文化的な混交化や創出が起こっている現代のカナダ先住民社会では先住民アートの新たな試みという点では大きな意義があるため（岸上2015）、岸上はこの可能性を追いたいと思った。しかし、ビヴァンとのやり取りでは、彼がマスター・カーバーとして彼自身の作品としてトーテムポールを制作したいという意向が強かったので、結果として第2候補とすることにした<sup>4)</sup>。

2018年度当時、岸上は北アメリカ北西海岸地域で先住民の捕鯨やホエール・ウォッチングの調査を実施中であり、かつ先住民も参加するネットワーク型の博物館学構築の調査に参加していたので、2019年2月19日から24日の間に実施したキャンベルリバーでの調査の一部として、面識のなかったビル・ヘンダーソンの工房を訪ね、トーテムポールの制作について話し合いを持った。なお、面談の設定については、キャンベルリバーを主な調査地としている三重大学の立川陽仁

に仲介してもらった。また、ヘンダーソンとの面談に先立って、キャンベルリバー博物館の元館長のレーシャ・デービス (Lesia Davis) と現館長のサンドラ・パリッシュ (Sandra Parish) から、同博物館が先住民制作者とトーテムポールの制作契約を結ぶ際の契約内容および制作経費に関する情報をもらった。特に、同博物館からは契約書のひな形を提供してもらったが、その契約書は後日、契約を結ぶときに大変に役に立った。

ここでは、ビル・ヘンダーソンとの交渉について簡単に紹介しておく。同氏は、2019年2月21日午前9時に滞在先のホテルに車で迎えに来てくれた。そして保留地の中にある彼の工房に連れて行ってくれた。そこでは甥でビル・ヘンダーソンの後継者と目されているジュニア・ヘンダーソンらが仮面を制作中であった。

ヘンダーソンには前もって来訪の目的を息子のウィルを経由して電子メールで知らせてあったが、日本の民博で新たにトーテムポールを制作したい旨をあらためて説明し、制作を請け負ってくれるかどうかを確認した。その上で、どのようなトーテムポールを作るか、制作費、制作時期、支払い方法などに関して話し合いを行った。

(1) 制作するトーテムポールの内容については、見て分かるように手書きのスケッチを作成してくれた。上からワシ、シシウトル (想像上のウミヘビ)、ハイイログマ (grizzly bear)、サケである (図1)。ワシはヘンダーソン一族の紋章である。またクワクワカクウの間ではシシウトルは偉大な力を象徴しているとのことであった。ヘンダーソンによると日本には龍の文化があり、それに似ているシシウトルを今回の図像として意図的に選びたいと言う。ハイイログマは、ビル・ヘンダーソンの母親の家系の紋章である。そしてサケを選んだのは、キャンベルリバーが「サケの都」と呼ばれるようにサケ漁が盛んな場所だからである。なお、この図案でトーテムポールを作成し、地域外に出すためには、キャンベルリバーのウェイ・ワイ・カム・ファーストネーション (The Wei Wai Kum First Nation)<sup>5)</sup> のバンド・カウンシルからの承認が必要であるので、民博側がこの図案でよければ、申請するとのことであった。

(2) トーテムポールの内容については、こちらから特別な注文はないが、現在、野外にあるトーテムポールの翼部分は2018年夏の台風によって破損したの

で、できる限り翼は大きくならないようにお願いした。したがって、当初提示されたトーテムポールの図面では翼は折りたたまれた状態になっている。

(3) 材料費と制作費については、ヘンダーソンによると、約10メートル(約33フィート)のヒノキ科の針葉樹「レッド・シダー」(*Thuja plicata*)の丸太は8,000～10,000カナダ・ドルかかり、制作費は1フィート(約30センチ)あたり4,600カナダ・ドル以上であることが判明した。

(4) 制作期間については、民博側の事情を説明して、2019年末ないしは2020年1月の完成をお願いした。ヘンダーソンによると彼を含め4人のカーバーが専従し、集中して作業を行えば、約3～4か月で完成させることができるとの回答であった。ちょうど1週間前にベルギーの個人コレクターに依頼され、制作したトーテムポール1本と丸木舟1隻を、ベルギーに向けて発出していた。当面は大きな仕事は入っていないので、丸太さえ入手できれば、期限内の制作と納入は可能であるとのことであった。

(5) 支払方法については、契約締結直後、完成までの中間時、完成後の3回(初回は制作費の半分、2回目と3回目はそれぞれ制作費の4分の1ずつ)に分けて銀行口座に振り込んで欲しいとのことであった。なお、材料費である丸太代は第1回目の支払い時に納入する必要がある。

(6) その他として、途中経過の定期報告について毎月1回、制作の進捗状況を連絡してもらうようにお願いした。制作地のバンクーバー島と日本では物理的な距離が大きく、定期的に訪問できないため、息子のウィル・ヘンダーソン(Will Henderson)が仲介者となり、電子メールで連絡を取り合うことになった。一方、ビル・ヘンダーソンからはキャンベルリバーから日本へのトーテムポールの輸送については責任が持てないので、民博側に手配のすべてをお願いしたいとの要望

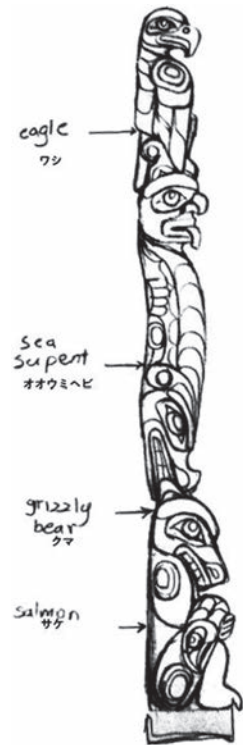


図1 トーテムポールの図案。  
キャンベルリバーにあるBill Hendersonの工房にて提示されたトーテムポールの図案, 2019年2月21日。

があった。

また、話し合いの後、ヘンダーソンは、キャンベルリバー市内に設置されている彼が制作したトーテムポールと復元制作したトーテムポールを見せて回ってくれた。この時にこれまでとは違う着色方法や木柱の固定方法について説明があった。

(7) ペンキ塗料でトーテムポールに着色を行っているが、雨風によって経年劣化し、色が褪せてしまうという問題を抱えていた。このことは民博の野外のトーテムポールを1977年開館当時と現在とで比べれば一目瞭然である。かつてはトーテムポールを時間の経過とともに自然に劣化させ、朽ち果てさせることが一般的であった。ヘンダーソンはトーテムポールを1日でも長く存続させるために、ペンキで着色した後、その上にニスを何度か塗り、トーテムポールの防水・撥水性を高める工夫を実施している。民博用に制作するトーテムポールにもこのやり方を採用したいとのことであった。

(8) トーテムポールの固定方法について説明があった。これまでは、伝統的にもトーテムポールの下方部を土中に埋め、固定させることが一般的であった。このやり方では、長きにわたり風雨にさらされるとトーテムポールの基盤部分が水分を吸収して腐ってしまうため、トーテムポールが傾いたり、倒れたりする。このため、1日でも長くもたせるために、最近、バンクーバー島のキャンベルリバーなどではトーテムポールの基盤部分を直接、土中に埋めずに、コンクリートで基礎を作り、その上に金具を用いてトーテムポールを浮かせて固定させるという手法を用いるようになった。この手法を民博用のトーテムポールにも使用したいとのことであった。

(7)と(8)のやり方は、「伝統的」なやり方とは言えないが、「伝統」は常に作り続けられるということを考えると、ヘンダーソン氏の提案も「新たな伝統」として認めることができるだろう。

以上のようなやり取りの結果、トーテムポール制作プロジェクトは2020年2月末から実質的に動き出した。制作に関する契約内容は話し合いに基づき、キャンベルリバー博物館の事例を参考にしつつ、民博側で英語版の原案を作成した。その原案については電子メールでやり取りし、修正・確認後、正式な契約書を作成し、国際速達便で現地に送付した。ヘンダーソン氏には同書類に署名後、民博

に返送してもらった。この製造請負契約は、2019年4月30日に締結された。

## 4 トーテムポールの制作過程と民博への搬入

### 4.1 素材となる丸太の入手について

2019年4月1日の時点では、何の問題もなく、制作プロジェクトは年末ごろまでに完了すると考えていた。しかし5月に入っても制作状況について、現地からまったく音沙汰がなかった。不安を覚えた岸上は、電子メールで連絡可能なヘンダーソンの息子ウィル・ヘンダーソンに状況を問い合わせた。

現地からの回答は、長さ10メートル以上、直径1.5メートル以上のレッド・シダーの丸太を入手できず困っているとのことであった。岸上はウィルに進捗状況を随時、メールで連絡してくれるように再度お願いしたところ、7月によく丸太を手に入れたとの連絡が入った。ビル・ヘンダーソンは4月から7月にかけて何度かバンクーバー島各地の伐採会社まで丸太材を見に行き、その上でバンクーバー島西部の1本を選んだとのことであった。また、春から夏にかけてヘンダーソンが体調を崩し、入院し膝の手術をしていたことも判明した。

岸上は、カナダ北西海岸先住民クワクワカワクゥとハイダの社会変化に関する現地調査を2019年8月に実施した際に、トーテムポール制作の途中観察を兼ねてキャンベルリバーに滞在中の8月8日にヘンダーソンを訪ねた。同氏は退院し、健康状態もよくなったとのことに対応してくれた。工房を訪れると大きく長い丸太が1本横たわっていたが、これは民博用の丸太ではなく、彼の甥のジュニア・ヘンダーソンが2020年5月中旬に父親の故ダニー・ヘンダーソン氏を記念したポトラッチを開催するために制作するトーテムポール用の丸太であるとのことであった。ビル・ヘンダーソンは、すでにバンクーバー島の業者から丸太を購入したものの、まだ届いていないということであった。

### 4.2 制作作業の開始と中断、再開

2019年9月上旬に丸太が工房に届いたという知らせ（写真3）が電子メールで届き、制作状況をうつした写真（写真4）によって制作開始を知った。このトー

テムポールの制作には4名が従事している。制作の総指揮をとるマスター・カーバーのビル・ヘンダーソン、その片腕のジュニア・ヘンダーソン（ビルの兄、故ダニーの息子）、グレッグ・ヘンダーソン、ジョナサン・ヘンダーソンである。

ところが、制作作業が始まったやさきの9月20日ごろに、ヘリコプターがヘンダーソンの工房に墜落し、作業ができなくなったと言う驚くべき知らせが届いた。ビル・ヘンダーソンはたまたま工房の裏庭に出ていたので、九死に一生を得たが、その後、突然、現地からの連絡が途絶えた。ヘンダーソンらは無事であったとは聞いていたが、制作中のトーテムポールが無傷なのかについても確認できないままの日々が続いた。そこでその時期にキャンベルリバーで調査を行っていた三重大学の立川に急遽、問い合わせたが、工房の近くには立ち入ることができず、制作中のトーテムポールの状態は確認できなかった。立川によるとヘンダーソンらはトーテムポールを一時的に別の場所に移動させ、管理しているらしいとのことであった。

さらに悪いことに、事故の後にビル・ヘンダーソンの甥のひとりが急死したという知らせが届いた。ビルとその家族は悲しみにあけくれたとのことである。このような事情によって制作作業の中断が1か月ぐらい続いた。

10月下旬からヘンダーソンが作業を再開したとの連絡を受けて、10月28日から30日にかけて、吉田館長と中京大学教授の亀井哲也が、バンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学人類学博物館との共同研究の途次、直接に現地に



**写真3** トーテムポールを制作するために入手した丸太。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房の裏庭にて、2019年9月16日、Will Henderson 撮影。



**写真4** トーテムポールの制作開始。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房の裏庭にて、2019年9月18日、Will Henderson 撮影。



**写真5** 吉田館長が現地を訪れた際、制作に従事したヘンダーソン一家のメンバー全員がそろった際の写真。2019年10月29日、吉田憲司撮影。

入り、制作状況を確認するとともに、その後の対応、とくに立ち上げ、据え付けの工法の確定と、輸送や制作者たちの訪日の日程などについて、調整をおこなった。その段階では、トーテムポールは、屋外のテントの中におかれ、下書きの線に沿ってチェーンソー（電機のごぎり）による荒彫りの作業の最中とのことであった（写真5）。

その後は、制作中のトーテムポールの写真（写真6）が電子メールで時々、送られてきた。写真を見る限りでは、荒彫りを済ませたあと、トーテムポールは工房の屋内に運び入れられ、手斧を使った手彫りの段階に入るなど、制作作業は順調に進んでいるようであった（写真7～11）。

一方、民博では、10月28日から12月26日までの間、クラウドファンディング「世界とつながる—トーテムポールをカナダ先住民のアーティストと造ろう」が実施された。吉田館長によれば、予算を補充するという目的もあったが、それ以上に、民博が単独で造りあげて公開するというのではなく、多くの方々にカナダの先住民文化に関心をもっていただき、制作のプロ

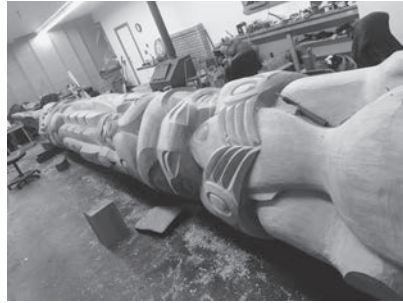


**写真6** トーテムポールの制作再開。キャンベリバーのBill Hendersonの工房の裏庭にて、2019年11月1日、Will Henderson撮影。





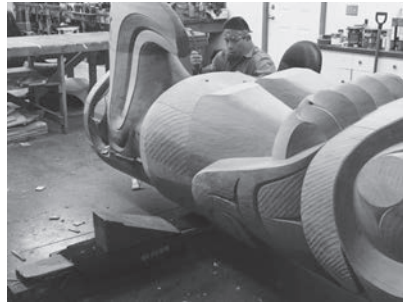
**写真 7** 工房に運び込まれた制作制作中のトーテムポール。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房, 2019 年 11 月 14 日, Will Henderson 撮影。



**写真 8** のみでの整形作業の開始。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房, 2019 年 12 月 10 日, Will Henderson 撮影。



**写真 9** のみで作業をするグレッグ・ヘンダーソンとジョナサン・ヘンダーソン。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房, 2020 年 1 月 8 日, Will Henderson 撮影。



**写真 10** のみで作業をするジュニア・ヘンダーソン。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房, 2020 年 1 月 18 日, Will Henderson 撮影。



**写真 11** 翼の部分を制作するビル・ヘンダーソン。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房, 2020 年 1 月 18 日, Will Henderson 撮影。

セスに参加してもらうことで、ともに新しいトーテムポールを作り上げたいと考えただけだと言う。その趣旨もあって、クラウドファンディングのウェブサイトですら、進捗状況の紹介がなされた<sup>6)</sup>。

12月中旬ごろに現地から2020年2月以前の完成は諸般の事情で難しいかもしれないとの連絡が入った。民博側はトーテムポールの大阪到着は2020年4月以降になると判断し、予算も年度をまたいで執行する計画に切り替えることを余儀なくされた。特に、キャンベルリバーからバンクーバーへの輸送の手配、その後の日本への輸送の手配の変更が必要となった。日本ではヤマト運輸を窓口としてカナダの運送会社を手配した。

#### 4.3 仕上げと着色、完成

ある程度、形が整うと制作中のトーテムポールを野外から工房内に移動させ、最後の仕上げに取り掛かる。そして最後にトーテムポールに着色を行うが（写真12・13）、それが乾燥するまで2週間程度、放置する。

2020年1月末に突然、トーテムポールが完成したとの連絡メールと添付写真（写真14）が送られてきた。完成したのは、現地時間で2020年1月31日とのことであった。搬送予定などをすでに大きく変更していたために大変に戸惑ってしまった。同年2月中旬にヤマト運輸のグループ企業のひとつであるヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社（以下、YGLJと略称）の依頼によって、



**写真 12** トーテムポールの着色作業開始。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房，2020年1月21日，Will Henderson 撮影。



**写真 13** トーテムポールの着色作業。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房，2020年1月22日，Will Henderson 撮影。



**写真 14** 着色作業が完了し、完成したトーテムポール。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房，2020 年 1 月 30 日，Will Henderson 撮影。

カナダの輸送会社 PACART の職員がキャンベルリバーのヘンダーソンの工房を訪ね、完成したトーテムポールの形状を確認し、長さや直径を計測し、重さを推測した。その上で、どのように梱包し、輸送するのかについて、日本側の輸送を担当するヤマト運輸を介して民博側と協議し、決定した。美術梱包で日本まで輸送すると 500 万円以上の経費が掛かるとのことであったので、民博側では安全性を

考慮しつつ、簡易梱包とすることで経費の削減に努めた。

吉田館長が完成したトーテムポールを確認し、ビル・ヘンダーソンに制作のお礼を申し上げたいと言うので、同トーテムポールの調査を兼ねて、2020 年 2 月 22 日に吉田館長、亀井哲也中京大教授と岸上はキャンベルリバーの工房を訪ねた（写真 15）。完成したトーテムポールの出来はすばらしく、ビルさんの代表作のひとつになると思った（写真 16）。

日本は台風の襲来が多いので、翼は付けないか、折りたたんだ図案で制作してもらうように依頼していたが、現物を見るとこのトーテムポールのワシに取り付ける 2 枚の大きな翼があることが分かった。このため、羽の取り付け方について工夫しなければならなくなった。



**写真 15** 完成したトーテムポールについて確認する吉田憲司（民博館長）と亀井哲也（中京大学教授）。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房，2020 年 2 月 22 日，岸上伸啓撮影。



**写真 16** 完成したトーテムポールとビル・ヘンダーソン。キャンベルリバーの Bill Henderson の工房，2020 年 2 月 22 日，岸上伸啓撮影。



**写真 17** 地元のショッピング・センター横に立てられたビル・ヘンダーソン制作のトーテムポール。同トーテムポールは宙に浮かせる形で固定されている。キャンベルリバー，2020年2月22日，岸上伸啓撮影。



**写真 18** 地元のショッピング・センター横に立てられたビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールの基礎部分。キャンベルリバー，2020年2月22日，岸上伸啓撮影。

実物を見た後，キャンベルリバーのトーテムポールが立っている現場に行って実例を見ながらトーテムポールの固定方法（写真 17・18）について，ヘンダーソン氏から説明を受けた。これらの2点については民博側では慎重に検討することが必要になった。2020年3月から翼の取り付けと補強方法およびトーテムポールの固定方法については，民博側と竹中工務店との間で協議し，具体的な実施方法を決定した。

#### 4.4 日本への輸送と民博への搬入

キャンベルリバーの工房でトーテムポールを簡易梱包し，バンクーバー港までの搬送は，カナダの運送会社 PACART（YGLJ が依頼）が行った。同社は，2020年3月5日（現地時間）にトーテムポールをバンクーバーに向け発送した。一度，バンクーバーの倉庫に搬入され，通関審査を受けた後，3月6日（現地時間）にバンクーバー港に搬入した。そして3月11日に輸送船に積み込まれ，3月13日にバンクーバーから日本に向けて発出した。この輸送を担当したのは，Ocean Network Express（YGLJ が依頼）であった。

同輸送船は2020年3月27日に神戸港に入港し，4月1日に大阪港に到着した。税関審査の後，4月10日に民博（特別展示棟 搬出入口横）に到着した（写真 19・20）。なお，大阪港から民博までの輸送を担当したのは，YGLJ であった。



**写真 19** トーテムポールの入ったコンテナが民博に到着。国立民族学博物館，2020年4月10日，吉田憲司撮影。



**写真 20** コンテナの中に収納されたトーテムポール。国立民族学博物館，2020年4月10日，吉田憲司撮影。

トーテムポールは、民博特別展示棟の搬出入口横で一時的に保管された。

## 5 トーテムポールの土台作り，建立，公開

当初トーテムポールは、ビル・ヘンダーソン一行を招聘して2020年5月27日に、民博本館の前庭に既存のトーテムポールと向き合うように建立する予定であった。その際にはそのトーテムポールに対して彼らによる祝福の儀礼を行ってもらう予定であった。しかしながらコロナウイルス感染症の問題が発生し、カナダからの訪日が不可能となり、この招への計画は順延となった。民博では、再開館された後にすみやかにトーテムポールを建立することに決めた。結局、作者のヘンダーソンらを招くことができないまま2020年6月23日に、トーテムポールを本館の前庭に運び、羽を取り付ける作業を行い、翌24日（休館日）にかけて建立することになった。

2020年6月23日にトーテムポールを特別展示棟の搬出入口横の保管場所から民博前庭の立ち上げ場所の横に移動し、トーテムポールに翼を取付けた（写真21）。

2020年6月24日午前10時に吉田館長による挨拶の後、関係者や報道記者に見守られながら大型クレーンを利用してトーテムポールの建立が行われた（写真22）。また、トーテムポールの翼部分に補強材の仮取付けそして土台への固定作業も行われた（写真23～25）。そして2020年6月25日から一般公開が始まった。なお、ヘンダーソン氏らによるトーテムポールの祝福の儀礼は、現時点では



**写真 21** 翼部分の取り付け作業。国立民族学博物館，2020年6月23日，西下真弓撮影。



**写真 22** トーテムポールの建立作業。国立民族学博物館，2020年6月24日，西下真弓撮影。

日程は未定であるが，コロナウイルス感染症問題が沈静化した後に実施する予定である。

民博ではトーテムポールの建立に先立ち竹中工務店による土台造りおよび建立後の整備が行われた。基礎工事他は，下記の日程で実施された。

- ・基礎工事（掘削，捨てコン，型枠，配筋）：2020年4月1～6日
- ・基礎工事（アンカーボルトセット）：2020年4月23～24日
- ・基礎工事（コンクリート打設）：2020年4月27日
- ・基礎工事（型枠撤去，基礎周り埋め戻し）：2020年5月11～15日
- ・トーテムポール移動（特別展示棟・搬出入口横→立ち上げ場所横）：2020年6月23日
- ・トーテムポールに翼の取り付け：2020年6月23日



**写真 23** トーテムポールの翼の仮固定作業。国立民族学博物館，2020年6月24日，中村真里絵撮影。



**写真 24** トーテムポールの土台の固定作業。国立民族学博物館，2020年6月24日，中村真里絵撮影。



写真 25 立てられたトーテムポール。国立民族学博物館，  
2020 年 6 月 24 日，Peter Mathews 撮影。

- トーテムポール立ち上げ：2020 年 6 月 24 日
- トーテムポールの翼の「仮」補強材取り付け：2020 年 6 月 24 日
- 基礎工事（基礎上部モルタル打設）：2020 年 6 月 26 日
- 基礎上部型枠解体：2020 年 7 月 14 日
- トーテムポール周辺芝敷設：2020 年 7 月 14 日
- 基礎上部モルタル補充：2020 年 7 月 29 日
- 基礎表面補修：2020 年 7 月 29 日
- 翼の補強材の本取り付け：2020 年 7 月 29 日

## 6 結語

本稿では、2020 年 6 月 24 日に民博の前庭に建立したビル・ヘンダーソン作の

トーテムポールの制作経緯，制作過程，輸送，建立の準備について報告した。このトーテムポールが民博の新たなシンボルとして，できる限り多くの来館者に見てもらいたいと考えている。

トーテムポールのようなモニュメントは，それを制作した人びとがいることを，さらに制作者の異なる描写表現によって独自の文化が存在していることを見る人びとに雄弁に物語る。トーテムポールは，北西海岸先住民族クワクワカワクウラの独自の文化とアイデンティティの存在を，日本人ら他者に対して発信し，存在を知らしめるための文化的装置である。トーテムポールを制作する知識や技法，技術が世代を超えて受け継がれ，作り続けられる限り，トーテムポールを作った人びとの文化は存在し続ける。そして，来館者の方々には，このトーテムポールを作った人びとや彼らの文化に思いを馳せてもらいたいと思う。

今回のトーテムポール制作・建立プロジェクトは，民博の教職員，現地の制作者，一般市民の支援者，運送会社や建設会社の関係者，カナダと日本の大学・博物館の関係者らの理解と協力を抜きにしては達成できなかった点を強調しておきたい。最後に，このプロジェクトでは，民博がトーテムポールを現地で制作をしてもらうことによって，キャンベルリバーのビル・ヘンダーソンのもとで修業をしている若手・中堅の技能継承者にトーテムポールを制作する機会を提供し，彼らの技術の継承や向上にも貢献したことを強調しておきたい。

## 謝 辞

本プロジェクトを完遂するにあたって，トーテムポールの制作者のビル・ヘンダーソン（マスター・カーバー），ジュニア・ヘンダーソン，グレゴリー・ヘンダーソン，ジョナサン・ヘンダーソンの皆様，ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館のジェニファー・クラマー准教授，三重大学の立川陽仁教授，キャンベルリバー博物館のサンドラ・パリッシュ現館長とレーシャ・デービス前館長には大変にお世話になった。心よりお礼を申し上げたい。

本稿を執筆するに際して，多くの方々から情報や写真の提供を受けた。キャンベルリバーのビル・ヘンダーソンのご子息ウィル・ヘンダーソンは，ビル・ヘンダーソンと日本側の連絡の仲介をしてくれるとともに，トーテムポールの制作開始から完成までの諸時点で撮影した写真を提供してくれた。また，企画課の南野晋也課長補佐からは，トーテムポールの輸送や民博側の準備に関する情報を頂戴した。民博の吉田憲司，Peter Mathews，伊藤敦規，上羽陽子，中村真里絵，生田節子，西下真弓の皆様と広報係からは，トーテムポールの受け入れや建立に関す



る写真を提供していただいた。本稿について吉田憲司民博館長と中村真里絵民博外来研究員のお二人からコメントなどを頂戴し、改稿した。これらの皆様に対して記して、感謝の微意を表すものである。

## 注

- 1) コロナウイルス感染症問題のために、予定より遅れ、2020年7月12日に開館した。
- 2) コロナウイルス感染症問題のために、開催予定期間は2020年10月1日から12月15日までに変更になった。
- 3) 北西海岸先住民のアートおよびアーティストについては、齋藤編(2015)と齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編(2010)、Townsend-Gault, Kramer, and KI-KE-In eds. (2013)を参照されたい。
- 4) 仮に新たなタイプのトーテムポール制作に賛同してもらえるならば、第1候補とする可能性はあった。
- 5) ウェイ・ワイ・カム・ファーストネーション(The Wei Wai Kum First Nation)はキャンベルリバーを拠点とするクワクワカワクウの一地域集団で、独立した政治単位としてバンド・カウンシルを有する。詳しくは、同組織のウェブサイト <https://weiwaikum.ca/> (2020年6月28日閲覧) をご覧いただきたい。
- 6) 吉田館長らによって民博で初めてクラウドファンディングを実施した。目標金額として300万円を設定したが、総計で251人から4,177,000円の資金が集まった(READYFOR 2020)。この試みは、民博の広報としても効果があったと考えられている。

## 参考文献

### 〈日本語〉

- エイムス, K. M. / H. D. G. マシュナー  
 2016 『複雑狩猟採集民とは何か——アメリカ北西海岸の先史考古学』佐々木憲一監訳, 設楽博己訳, 東京: 雄山閣。
- 大貫良夫  
 1997 「トーテム・ポール——その社会的ならびに歴史的意味について」『民族学研究』41(4): 317-329。
- 岸上伸啓  
 2001a 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について——毛皮交易とその影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3): 293-354。  
 2001b 「北太平洋における交易」大塚和義編『ラッコとガラス玉』pp. 91-94, 大阪: 千里文化財団。  
 2015 「カナダにおける先住民アートの展開について」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告131号) pp. 23-44, 大阪: 国立民族学博物館。  
 2020a 「北西海岸先住民(カナダ)」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp. 107-122, 大阪: 国立民族学博物館。  
 2020b 「カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化」『月刊みんぱく』3月号(510): 6-7。
- 齋藤玲子編  
 2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告131号) 大阪: 国立民族学博物館。

岸上 国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』 京都：昭和堂。

細田忠俊

2015 『トーテムポールの世界——北アメリカ北西沿岸先住民の彫刻柱と社会』 東京：彩流社。

READYFOR

2020 「世界とつながる——トーテムポールをカナダ先住民のアーティストと造ろう」  
<https://readyfor.jp/projects/minpaku2019> (2020年6月25日閲覧)

〈英語〉

Boas, F.

1888 On Certain Songs and Dances of the Kwakiutl of British Columbia. *The Journal of American Folklore* 1(1): 49–64.

1910 *Kwakiutl Tales*, Vol. II. New York: Columbia University Press.

1935 *Kwakiutl Culture as Reflected in Mythology*. New York: The American Folklore Society.

1966 *Kwakiutl Ethnography*. In H. Codere (ed.) Chicago: University of Chicago Press.

Townsend-Gault, C., J. Kramer, and KI-KE-In (eds.)

2013 *Native Art of the Northwest Coast: A History of Changing Ideas*. Vancouver and Toronto: UBC press.

## 付録

### ビル・ヘンダーソン (Bill Henderson)

現代のカナダ北西海岸先住民アートを代表するマスター・カーバーのひとりであるビル・ヘンダーソンは、クワクワカワクウ民族であり、キャンベルリバーのウェイ・ワイ・カム・ネーション (バンド) の一員である。1950 年にキャンベルリバーで生まれた。父親はブランデン・ハーバー出身で、キャンベルリバーに移り住んだ著名な先住民アーティストのサム・ヘンダーソン (Sam Henderson, 1905-1982) である。母親はキャンベルリバー地域のチーフの家系に属するメイ・クオックススター・ヘンダーソン (May Quocksister Henderson) である。両親ともに伝統文化の継承者であり、復興と保全につとめたことが知られている。ビルの兄である故ダニー・ヘンダーソン (Danny Henderson) と故マーク・ヘンダーソン (Mark Henderson) も有名な先住民アーティストであった。

ビルは小学 1 年生の時に、教師のために小さなシャチを彫った板 (plaque) を作った。今でもその作品は母校であるキャンベルトン小学校で展示されている。彼が 19 歳の時に初めて作品を売り始め、先住民アーティストとしての道を歩み始めた。彼は多数の伝説や神話を熟知しており、それらの中からワシやクマ、シャチ、シシウトル (双頭のウミヘビ) などを制作テーマ・対象として選び出し、トーテムポールや仮面、木製器、パドルを制作してきた。特に、これまでに 50 本以上のトーテムポールを制作してきたことが知られている。そのうちの 1 本は、1993 年にキャンベルリバーの姉妹都市である北海道石狩市の市庁舎前に建立した。また、キャンベルリバーのビッグハウスの中の 4 本のトーテムポール (家柱) は 1997 年に制作した代表作のひとつである。

ビル・ヘンダーソンは先住民アーティストとして知られているが、伝統的なダンスの踊り手でもあり、数多くのポトラッチや儀礼においてパフォーマンスを見せてきた。また、漁船を所有しており、夏季や秋季の漁期にはサケやオヒョウなどを捕る漁師でもある。